

若手奨励研究 研究成果報告書（概要）

研究課題名：看護学生が人間のからだのしくみを統合的に描くための基礎的研究

研究者名：藏元恵里子、田中美智子、山岸仁美

看護学生が人体の構造や生理学的反応を描けるための学習支援の改善に向け、2つの課題に取り組んだ。課題1では、2年次生の人間常態学・病態学実習「循環：心電図の測定と呼吸性不整脈の観察」の実習内容および記録物の分析から、看護学生が生体データを分析する過程と考察の特徴を示した。課題2では、携帯型超音波診断装置を用いた模擬講義を展開し、アンケート調査から学生のニードや講義に導入する際の検討事項を明確にした。

課題1：看護学生が生体の内部構造を描く際の特徴の明確化

【目的】人間常態学・病態学実習「心電図の測定と呼吸性不整脈の観察」（以下、本実習）の記録物を分析し、看護学生が生体データを分析する際、どのような事象に注目し、からだのイメージを豊かにしているか、その特徴を明らかにする。

【方法】平成30年度に本実習を受講した学生のうち、研究協力の得られた93名(n=101、回収率93%)の記録物を対象とした。心電図データについて分析の正誤、呼吸性不整脈の実験結果と考察の整合性を確認した。考察内容はわかる文節で取り出し、類似性のある内容をグループに類別した。本研究は、宮崎県立看護大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】呼吸性不整脈の実験について、生理学的知識の記述は86.0%、呼吸性不整脈の実験結果の記録に反映したという記述は33.3%、結果と考察に整合性がみられたものは65.6%であった。考察内容には〈自己の正常な心機能〉〈精神活動による生体の変化〉〈測定や記録時の手技の問題〉〈体調による生体の変化〉という特徴がみられた。

【考察・結論】呼吸性不整脈が実験結果に反映したという記述は3割であり、考察との整合性が低くなった。しかしながら、結果が生理学的知識と一致しなかった場合、学生は、測定時の状況や生活現象に解剖学的知識を照らし生体への影響を考察していた。

【Key Words】看護学生、心電図、学習支援

【研究成果の発表など】藏元恵里子、山岸仁美、田中美智子(2019):看護学生が人間のからだのしくみを統合的に描くための基礎的研究—心電図の測定・分析の記録物より—、第39回日本看護科学学会学術集会

課題2：教材の考案および実習内容の改善についての検討

【目的】携帯型超音波診断装置(エコー)は、血管系、膀胱、肺などを診ることができる。本学の実習等に、生体の内部を豊かに描くためのツールとして導入できないか検討する。

【方法】医療系専門学生17名を対象に、操作を講義し、4件法のアンケートと自由記載に記入してもらった。実施する上で、学校に許可を得て、学生に、調査の目的・方法、講義外の実施であること、成績とは関係ないこと、参加は自由であることを説明し同意を得た。

【結果】「エコーを操作することができたか」について、そう思う・ややそう思うは94.1%、「画像を見て臓器や位置は確認できたか」は88.2%、「実際に身体の中のイメージにつながったか」は94.1%、「興味をもって実施することができたか」は100%であった。

【考察・結論】調査結果からエコーで身体内部を確認したことにより3次元でのイメージが拡大していたと考えられた。小型エコーの調査では、学生が確認できる臓器、学生の興味や視点などが明確となり、その導入は有効であることが示された。

【Key Words】携帯型超音波診断装置、医療系専門学生、アンケート調査